

生態画と剥製を核とした企画展 「動物のくらしとかたち」の評価と実践

神奈川県立生命の星・地球博物館 学芸員 加藤 ゆき
石浜 佐栄子 大坪 奏
名誉館員 広谷 浩子

1. はじめに

近年、博物館の来館者は多様化し、幅広い世代の人々、さまざまな特性やバックグラウンドを持つ人が訪れるようになってきた。自然史博物館である当館（神奈川県立生命の星・地球博物館）も、かつては学校行事で訪れる小中学生や小学生を含む家族連れ、大人が来館者の大多数を占めており、大人と小学生を主なターゲットとして展示内容や解説文を検討していれば大きな問題は生じなかった。しかし昨今は、幼児、高齢者、障害のある人、日本語を母国語としない人の来館も増えている。特に幼児については増加傾向が著しく、入場券の発券ベースで見ると、開館時(1995年)には全体人数の6～7%程度しかいなかった園児(3歳以上の未就学児)が、ここ10年ほどは13～15%と倍増している。(石浜,2023)。園児の場合、学校等による団体ではなく個人単位での利用が多いため、「幼児を含む家族連れ(以下、“親子連れ”と称す)」の来館が増えていると推定される。幼児の来館増は当館のみならず、多くの自然史博物館や科学館においてしばしば話題となっており、少子化が進む世の中にも関わらず、週末の展示室は“親子連れ”を抜きには語れなくなっているのが現状である。

このような状況を受けて発表者らはこれまで、増加する“親子連れ”来館者層をターゲットとして幼児も保護者も楽しめる博物館体験の提供について模索してきたが(石浜ほか,2022;石浜ほか,2024)、新型コロナウイルス感染症拡大の影響もあり、“親子連れ”が楽しめる展示について十分に検討することができていなかった。来館者の理解度や満足度の高い展示を作るためには、展示の「評価(エバリュエーション)」を実施し、来館者の現状やニーズを把握して企画を再検討したり、展示物の修正や改善を行ったりすることが大切である。そこで、コロナ禍を経て計画された2023年度企画展において、来館者のニーズ調査も取り入れながら、大人だけでなく“親子連れ”も楽しめる展示の評価と実践を行うこととした。

展示の評価は、企画段階に行う事前評価、展示形成の途中で行う形成的評価、展示完成後に行う総括的評価の3つが考えられる。今回は、当館の2023年度企画展「動物のくらしとかたち—数内正幸が描いた生態画の世界—」において、企画展開始前の形成的評価と開催中の総括的評価を実施した。形成的評価では、試作展示を製作して来館者ニーズを把握し、その結果を

受けて展示内容の検討を行った。総括的評価では、企画展の開催中に来館者の行動を観察した上で、展示の改善を検討した。ここでは、本企画展の評価と実践の成果について報告する。

2. 企画展「動物のくらしとかたち」に向けての形成的評価と来館者ニーズ調査

企画展「動物のくらしとかたち―藪内正幸が描いた生態画の世界―（2024年2月23日～5月12日）」は、動物生態画家として著名な藪内正幸氏のイラストを当館収蔵の剥製や写真等とともに展示し、動物の生態や形態を伝え、動物生態画の重要性や魅力などを紹介しようと企画した展示である。図鑑やポスターなどに掲載された生態画の原画をじっくりと見てもらう展示と考えると、主なターゲットは大人ということになる。しかし藪内氏は絵本の原画や児童書の挿絵も多く手がけており、当館への来館が多い子育て世代にも訴求力があると考えられる。そこで本企画展では、大人向けエリアと“親子連れ”エリアを設けることを検討した。

この展示の核となるのは、生態画（イラスト）と剥製である。生きている動物の姿を伝える生態画と、実物標本である剥製の双方を対になるよう展示することで、動物のくらしぶりやかたちの多様さに対する理解が深まることを期待したが、「幼児は剥製を『死』に近いものとして怖がるのではないか？むしろ精巧に作られたぬいぐるみを使った展示の方が、親子連れには受け入れられやすいのではないか」という声が企画メンバーの中から上がった。そこで、藪内氏による絵本『のうさぎ』を題材に、「①ノウサギの剥製＋生態画」、「②ノウサギのぬいぐるみ＋生態画」という2種類の試作展示を作ってそれぞれの印象や好みを問うことで展示の形成的評価を行い、あわせて「どのような展示を見たいか」という来館者のニーズ調査も実施することとした。当館で行う企画展であることから、実際に当館に来館した人を対象としてアンケート調査を実施し、2日間で202枚の回答を得ることができた。

試作展示に対する好みや印象についての回答を分析すると、約3分の2の人が「①剥製＋生態画」、約3分の1の人が「②ぬいぐるみ＋生態画」の展示を好むこと、更にこの割合は回答者の属性が、幼児を含む小学生以下の子どもを連れた家族か成人かに関わらずほぼ一定であることがわかった。その理由として、子どもを連れた保護者の多くが「博物館では子どもに本物を見せたい」と記述しており、成人のみで来館した個人やグループと比べて剥製を忌避するわけではないことが明らかになった。また「どのような展示を見たいか（複数回答可）」というニーズ調査に対しては「生きものの勉強になる展示」という回答が最も多く、「原画中心のシンプルな展示」や「スマートフォンやタブレットで多くの情報を知ることができる展示」はあまり好まれなかった。見たい展示の傾向は、回答者の属性以上に「①剥製＋生態画」派か「②ぬいぐるみ＋生態画」派によって左右され、「①剥製＋生態画」を好む人は「生きものの勉強になる」展示を、「②ぬいぐるみ＋生態画」を好む人は「子どもが見やすい」「親子で楽しめる」「一緒に記念撮影できる」展示をより強く嗜好する傾向にあることが明らかになった（表1）。

表 1. 来館者ニーズ調査における回答結果.

どのような展示を見たい ですか（複数回答可）	小学生以下の子どもを連れた家族		成人のみの個人・グループ	
	①剥製派 n=71	②ぬいぐるみ派 n=33	①剥製派 n=43	②ぬいぐるみ派 n=17
生きものの勉強になる展示	58%	30%	72%	53%
原画だけではなく剥製や ぬいぐるみも使った展示	46%	42%	58%	41%
原画中心のシンプルな展示	8%	6%	16%	18%
子どもが見やすい (低い位置にある) 展示	45%	76%	37%	47%
親子で楽しめる展示	45%	61%	28%	47%
一緒に記念撮影できる展示	32%	33%	19%	41%
スマホやタブレットで多くの 情報を知ることができる展示	6%	9%	14%	12%

3. 企画展「動物のくらしとかたち」の展示の構成と工夫

小学生以下の子どもを連れた家族の来館者の多くが剥製を忌避するわけではないという形成的評価の結果を受け、当初の企画通り、“親子連れ”エリアも大人向けエリア同様、生態画と剥製を核とした展示とする方向で準備を進めることとした。また来館者ニーズ調査の結果から、「生きものの勉強になる」内容は基本に据えつつも、「子どもが見やすい（低い位置にある）」「親子で楽しめる」展示を望む人が

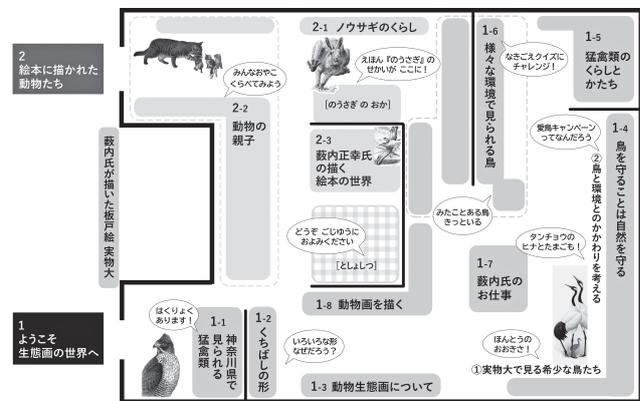


図 1. 企画展会場図.

が多いこと、「①剥製+生態画」よりも「②ぬいぐるみ+生態画」を好む人が回答者の属性を問わず一定の割合で存在することをふまえて検討を進め、展示を構成した（図 1）。

1) 大人向けエリア「ようこそ生態画の世界へ」

入口には「神奈川県で見られる猛禽類」のペン画を 14 点配置し、ウェルカムボードを構成した。猛禽類は成人が好む傾向のある鳥で、実際にペン画に見入っていたのは、成人男性が多いように見受けられた。そのほか、「くちばしの形」「様々な環境で見られる鳥」などのコーナーを設け、生態画と剥製を隣に配置し、それらを見比べながら鳥のくらしや体の形に

ついて考えてもらう展示とした(図2)。さらに「絶滅が心配される鳥」や「身近にみられる鳥」を取り上げることで、人間と鳥との関わりを紹介し、来館者に自らのくらしを振り返ってもらうコーナーも設けた。一番の見どころは「実物大で見る希少な鳥たち」で、自分と背比べしながら実物大の精密な生態画を楽しめる趣向とした。生態画を引き立たせるため、解説は最低限の文字数にとどめ、極力シンプルな構成につとめたせいか、多くの来場者は精密に描きこまれた原画と横に配置された剥製をじっくりと鑑賞していた。来館者ニーズ調査で要望のあった音声動画は、藪内氏の原画と音声ファイルを用いて「鳴き声クイズ」としてオリジナル動画を作成し、自動再生を行った。ここでは、属性を問わず来館者の注目度が高い傾向が見られ、特に“親子連れ”は、子どもが親に対して鳴き声について質問をしている光景が頻繁に見受けられた。



図2. 実物大ポスター原画と剥製。

2) “親子連れ” エリア「絵本に描かれた動物たち」

絵本『のうさぎ』の世界を剥製で再現した「ノウサギのくらし」コーナー、“親子連れ”に親近感を持って見てもらいたいと構成した「動物の親子」コーナー、児童書の挿絵などを集めた「藪内正幸氏の描く絵本の世界」コーナーの3つのコーナーを設置した。子どもの目線で見やすいように、低い展示台に剥製を露出展示し(図3)、動物の親子が描かれたポストカードを解説パネルとして用い、ひらがなで種名を記すなど、幼児から小学校低学年の児童を意識した手法を用いた。また大型本も含めた藪内氏の絵本や図鑑等を自由に閲覧できるスペース「としよしつ」を設置し、ノウサギの親子やカルガモの親子などの精巧なぬいぐるみを委託製作して配置することで、剥製よりもぬいぐるみを好む来館者層にも配慮を示した(図4)。



図3. 子どもの目線を意識した露出展示。
動物の親子を紹介した。



図4. ぬいぐるみも配置した「としよしつ」。

3) 館内フォトスポットの設置や SNS 広報、 「ぬいぐるみと記念撮影」イベントの開催

原画保護のため展示室内は撮影禁止としたが、「記念撮影をしたい」「絵本の世界に入って一緒に撮影したい」という来館者ニーズに応えるため、館内の各所に4種類の記念撮影スポットを設け、SNSを用いた広報にも活用することとした(図5)。また、ぬいぐるみと一緒に記念撮影できるイベントを実施した。



図5. 記念撮影スポットのひとつ。
コウテイペンギンは実物大の
大きさとなるよう設計した。

4. 来館者調査による総括的評価と展示の課題改善

展示の完成後にも課題の洗い出しと改善方法の検討を行うため、来館者調査(行動観察および発話採集)による展示の総括的評価を実施した。まず、コーナーごとに展示のねらい(評価の観点)を改めて明確化したうえで、実際に発表者らが展示室に立って来館者の行動や会話を観察・聴取し、コーナーごとの展示ねらいが十分に達成できているかどうかを調査した。

その結果、「猛禽類のかたちとくらし」や鳴き声クイズを含む「様々な環境で見られる鳥」では、「(チゴハヤブサがトンボを捕食している絵を前に)こんな光景を見たいね」「(公園で見られる鳥の絵を前に)あ!この鳥見たことがある」「(鳴き声クイズのモニターを前に)この鳥はこんな声で鳴くんだね」といった会話が目立つなど、ねらいが十分達成できていた。一方で、「対になっている生態画と剥製を見比べて楽しんでほしい」という企画者側のねらいは来館者にほとんど伝わっていないことがわかった。

生態画も剥製もそれぞれを熱心に見ている来館者は多かったものの、隣に並べている生態画と剥製の関連性に気づき、自ら見比べたり何かを発見したりすることは難しいようであった。「見比べると、逆にポーズなどのささいな違いが気になってしまう」という意見もあり、絵本のページと剥製を並べていた「ノウサギのくらし」コーナーについては、会期中に展示の変更を試みた。まず絵本(生態画)を撤去し、剥製の横に「おっ、ノウサギだ!(クマタカ)」「にげる~(ノウサギ)」「おなかすいたな~(キツネ)」「みつかりませんように…(仔ノウサギ)」などのセリフを吹き出しで表現することで、絵本に出てくる動物たちの関係性を示すコーナーへと変更した(図6)。その結果、剥製を含むジオラマが何を表すのか、来館者は理解しやすくなったようで、特に“親子連れ”によるセリフの読み上げとそれをきっかけに始まる会話が増えている印象



図6. 「ノウサギのくらし」のジオラマ。
左: 修正前(絵本と併存)、右: 修正後(絵本を撤去し、
紹介パネルと吹き出しセリフを設置)。

があった。他のコーナーについては、気づいてほしい点や会話のきっかけになるような「話のタネ」を平仮名10～20字程度でまとめ、“親子連れ”にも気付いてもらえるよう足跡マークを使って新たに掲示した(図7)。

展示終了後の反省点としては、床に配置した動物の足跡マークが挙げられる。入口から展示室への誘導を想定して設置したもので、好評だった反面、注目を集めすぎて来館者、特に幼児は足跡を追いかけ



図7. 足跡マーク(O)を使った話のタネ提供。

ることに夢中となり、本来見てもらいたい剥製や生態画を素通りされてしまった。あれもこれもと欲張って注目ポイントを考え、展示の焦点が散漫になり、結果として本来の趣旨を来館者に伝えきれなかった点については、今後の教訓としたい。

5. おわりに

今回、形成途中から完成後まで一連の展示評価を実施しながら企画展を開催することができた。試作展示を提示しての形成的評価によって展示の方向性を確認できたこと、来館者ニーズ調査をふまえて展示内容を検討できたこと、完成後の来館者調査によって展示を改善できたことは、いずれも大変有意義であった。今後ますます博物館の来館者は多様化し、従来の展示手法では不十分となる機会も多くなっていくと考えられる。さまざまな年齢層、構成グループに対応していけるよう、今後とも来館者の現状やニーズを把握し、展示の検討や改善を続けていきたい。

本研究で用いた生態画やデジタル素材は数内正幸美術館(山梨県北杜市)から提供いただいた。また、本研究の一部には、JSPS 科研費20K01132「幼児と親に豊かな博物館体験をいかに提供するかー会話を誘発する新たな展示デザイン」および22K01024「発話採集によるハンズオン展示の再評価の試みー展示の再構築を目指して」を使用した。

引用文献

石浜佐栄子,2023. より良い企画展を作るには?～展示を評価しながら考える. 自然科学のとりら, vol.29,no.3, 20-21.

石浜佐栄子・加藤ゆき・大坪 奏・広谷浩子,2022. 幼児と親に豊かな博物館体験を提供することを目指してーウィズコロナ時代における試みー. 全国科学博物館協議会第29回研究発表大会講演要旨,47-52.

石浜佐栄子・加藤ゆき・大坪 奏・広谷浩子,2024. 自然史博物館におけるぬりえを用いた教育普及プログラムの実践と評価～幼い子どもを対象としたハト3種のぬりえを例に～. 日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要,(28),113-122.